

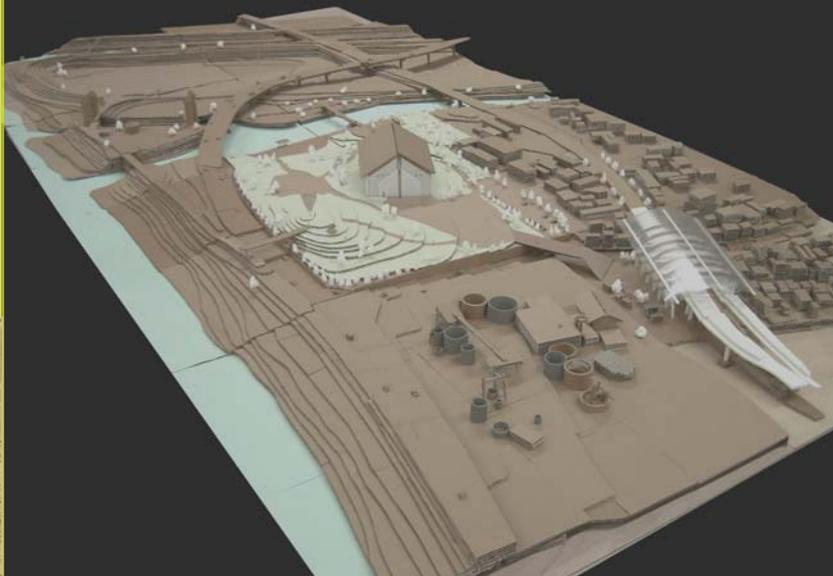
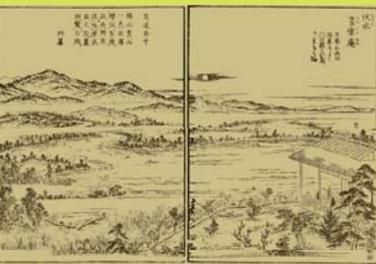
対象地域＝京都、伏見。

伏見のまちは、今でこそ京都の一部となっているが、京の街中とは異なる歴史を持っている。その昔、ここは宇治川・目黒池（おくらいけ）に開けた港町であった。伏見の南側を流れる宇治川は、下流で桂川・木津川と合流して淀川となり、大阪湾へと流れ込んでいる。船が物資の運搬の主だった時代には、大阪からきた船は、伏見の地で、洛中に向かう高瀬舟に乗り換えた。そのためここは、人と物資の運搬を中継する港町として、非常に大きな役割を果たしていた。

目黒池は、現在の桂川・木津川・宇治川が合流する地点までも範圍に入るような、巨大な池であった。豊臣秀吉が伏見城山城を築城したころに大規模改修が行われ、宇治川の流路も現在のように大きく変更された。その後も何度も改修が行われて、最終的に目黒池は、昭和の初めに完全に埋め立てられ、農地となった。

しかしながら、この目黒池の存在自体は失われていない。先人たちが楽しんだ宇治川と目黒池の風景が、まだ残っているのだ。

伏見の地域から望む雄大な風景を取り戻すべく、私たちは立ち上がった。



高密度な街中で暮らすわたしたちは、仕事や学校など日々の生活に追われ、うんざり鬱々してしまうことがある。'むーっ、もうダメだあ！'と、クサクサして叫びたくなるのだ。そんな時、気持ちを開放してくれる、心を洗ってくれる場所。私場所。

全てを包容してくれる、あったかい場所。私場所。

これは、健全な人間社会にとって必要不可欠なものである。

私の場所はどこに在る？

宇治川の川辺に立つ、大きな空と、地平線。心地よい風、そして、水のきらめき。ここで五感が味わう感覚は、なにもにもかえがたい。そう、ここが、私の場所となるべきなのだ。

しかし、誰が知っているだろうか？こんなに近くにある唯一無二の場所を。

まちの縁側、私の場所

近接する宇治川の雄大な風景を地域に取り戻す

京都大学 工学部地球工学科 4 回生：瀬戸 裕美子、田中 有紀、出島 茜、長縄 雄一郎、野田 早紀、半田 伸太郎、村上 理昭、柳本 佳楠子、3 回生：木村 真緒、木村 優介
京都大学大学院 工学研究科 景観環境計画学 D-2 山口 敦太、D-1 松下 倫子 協力者 京都大学大学院 工学研究科 景観環境計画学 出村 嘉史

現状分析 一まちと宇治川を分断する 2 つの障害一

伏見は、酒蔵を中心とした街並み、宇治川流派沿いの舟運の記憶、酒造りに欠かせない名水などの景観資産に恵まれた街である。また南に広がる宇治川（旧目黒池）は雄大で美しく、近代土木遺産も複数あり、解放的な憩いの場所となるべき場所である。しかし京阪線、外環状線、そして化学工場によって、中心市街と宇治川は切り離されてしまっている。中書島駅以北から宇治川へのアクセス環境は決してよいものではなく、街から宇治川を感じることは難しい状況である。



政策のありかた 一まちづくりは場所づくり、人づくり一

公共政策を実現していくには、具体性を伴った明確なビジョンが必要である。実際の政策は、そのための具体的な方策として打ち出されるべきである。現在、この伏見のまちに対しても、行政によりいくつかの方策が掲げられている。しかし、それらの長期的なビジョンと具体的な方策はともに、はっきり見えないのが現状である。

私たちは、まちづくりは場所づくり、ひいては人づくりだという考えに基づき、10 年、20 年、さらには 100 年というスパンで伏見の住人の地域に寄せる愛着を醸成できるような、具体的な施策を考えている。それは、まるで自分の家の庭のような場所を地域の中に見出し、災害時にはその場所で互助が自然に進められるような「場所づくり」である。

「場所」とは何か

エドワード・レヴィフによると、場所は次のように定義されている。
 —— 抽象的なものや概念ではなく、生かされる世界の連続に経験された現象。それは個人的なまたは社会的に共有されたアイデンティティの重要な源泉であり、多くの場合、人々が深く感情的かつ心理的に結びついている人間存在の根源である。 ——
 ある人がある空間で様々な活動を、経験することで、各地点に場所が形成される。
 各地点が誰のための、どのような場所であるかを考えることは、そこに在る人の視点に立ったまちづくりを可能にする。

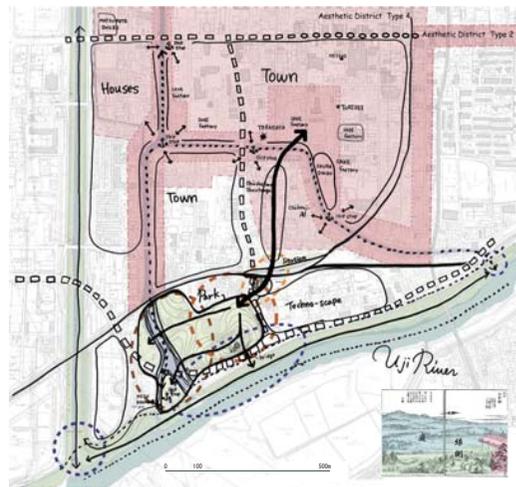
施策のねらい

伏見に「私の場所」を作る第一歩として、宇治川を地域に取り戻すことを考えた。左記の現状分析の通り、その南北の軸は 2 つの障害で分断され、まちから簡単に行くことはできない。しかし、宇治川を含めた水辺の空間は、港町伏見と目黒池の歴史を考えると、まちとは切り離せないものである。この空間こそが、伏見に住む人の場所として、伏見のまちのアイデンティティを確立させる鍵を握っている。宇治川を含めた水辺空間を取り戻すためには、現在の魅力を生かしながら、障害となっているものを克服するべきであると考えた。

具体的な施策

1. 駅前サンクンガーデンによる Vantage Point の創出
2. 伏見港公園の拡張・地形造成による幹線道路の乗越
3. 災害時の利用を考慮した街中の水辺空間の整備

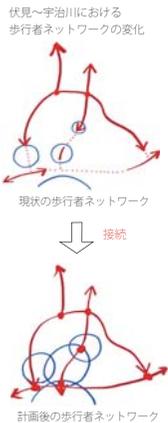




本計画のコンセプト

近代化の過程で、道路・鉄道の整備が伏見の町と宇治川とを、宇治川派流や東高瀬川と宇治川本流とを分断してしまった。本計画では、現在の貧弱な伏見の歩行環境を改善し、人々に宇治川(河川敷)という優れた公共の場所を取り戻すことを目的とする。そのために、まず、まちと宇治川の接続部(主に中書島駅周辺)や、宇治川派流や東高瀬川と宇治川本流の合流地点などの、分断されたアクセスを接続し、歩行者のネットワークを作る。

さらに伏見の歴史的水域環境を生かしながら、公園や川、駅などの既存の都市機能を再接続することによって、歩行者のネットワークを強化し、まちと優れた自然環境を結んだ、生き生きとした都市環境の創造を図る。



計画後の歩行者ネットワーク

駅前サンクンガーデンによる眺望点 (Vantage Point) の創出

高密度な街中から宇治川の水辺の空間へと日常の活動範囲を広げたい。現在は、京阪電車の軌道がこの水辺へのアクセスの第1のバリアとなっているが、同時に中書島駅は、伏見のまちと宇治川のリアとの結節点となり得る。

そこで、駅周辺の地面を掘り下げて京阪線の嵩上げを行い、プラットフォーム下にサンクンガーデンを創出する。中書島商店街の先に、日光がよく照るこのサンクンガーデンが見逃せるようになる。この広場は、階段およびブリッジに導かれて、竹田街道を越えて公園へ至る経験を促す。駅と車道、歩道が立体的に収まるために、障害なくスムーズに宇治川まで行けるようになる。

このサンクンガーデンを明るい空間にするために、南側にガラス面吹抜空間を持つ「透ける」駅の構造を設計する。プラットフォームにあたるサンクンガーデンは、南北の両方向を望んで自らの位置を確かめることのできる眺望点 (Vantage Point) として、まちと水辺の公園の両者を視覚的につなぐことが一つの目的である。



駅内 V.P. からの眺め 公園より中書島駅を望む

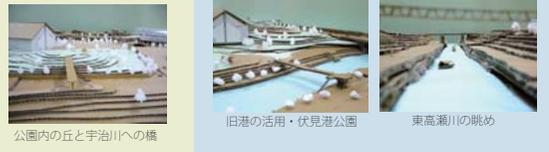
伏見港公園の拡張・地形造成による幹線道路の乗越

まちから宇治川水辺へ、このアクセスの第2の、そして非常に大きなバリアが、歩行者に立ち入りを禁じる幹線道路・外環状線が存在する。さらに伏見港公園は、今でも大きな敷地を持ち、スポーツ施設としてよく利用はされているが、幹線道路を隔てた先の大きな水辺とは関係が絶たれている。

これらの問題を克服し、伏見固有の場所を取り戻すために、伏見港公園の地形造成も含めて、3次的に公園敷地を拡張して、全体を水辺の公園として捉えなおすデザインをする。

一つの主要なデザインは、公園内の丘の造成である。丘まで渡る小道で導かれる先には、荷蔵による Vantage Point ができる。ここからは、駅やまちの方向、および三橋閘門を中心とした港跡、そして長らく失われていた宇治川・巨椋池への眺望が得られ、自らがどのような地理に立っているのかを知ることができる。この丘から伸びるブリッジによって、これまで容易に渡れなかった宇治川(河川敷)へ環状線を越えて至ることができ、この丘は、堤防を強化し防災的な効果も期待される。

そもそも伏見港公園は、三橋閘門などの土産や船着場など、点的な魅力的な地域資源を備えている。園内を走る小道と、視覚的な関係性の設計によって、これらの要素をつなぎあい、一つの大きく伸びやかな場所としての領域感を育てるだろう。



公園内の丘と宇治川への橋 旧港の活用・伏見港公園 東高瀬川の眺め

災害時の利用を考慮した街中にある水辺空間の整備

洪水や地震などの災害により交通経路が断たれ物資などの輸送が出来なくなった場合、有効な交通手段として、舟運の活用が有効であると考えられる。

伏見は、かつて水上交通が栄えた有名な港町であった。昔のように日常の交通手段として街中に船を走らせることにより水運を身近なものとして生活に取り込む。また、これより宇治川へ行く為の便利な交通手段となる。さらに災害時の需要を考慮、非常用の船着場を数箇所設置する。この船着場は普段は休憩所として開き、川辺を散歩する人たちの憩いの場にする。また、街の西端にある東高瀬川の引川敷は、高い堤防に囲まれており田舎感のある気持ちの良い場所になるポテンシャルが高い。そこで遊歩道や休憩場所を設けることにより河原を街と宇治川をつなぐ経路の一つにする。橋をかけることで東西の往来を容易にする。

このように、川(「みち」として)の機能を人々に定着させるとともに、人々に川に対する親近感を持たせる。また、非常時にも利用しやすい環境を整える。



Phase 1



Phase 2



Phase 3

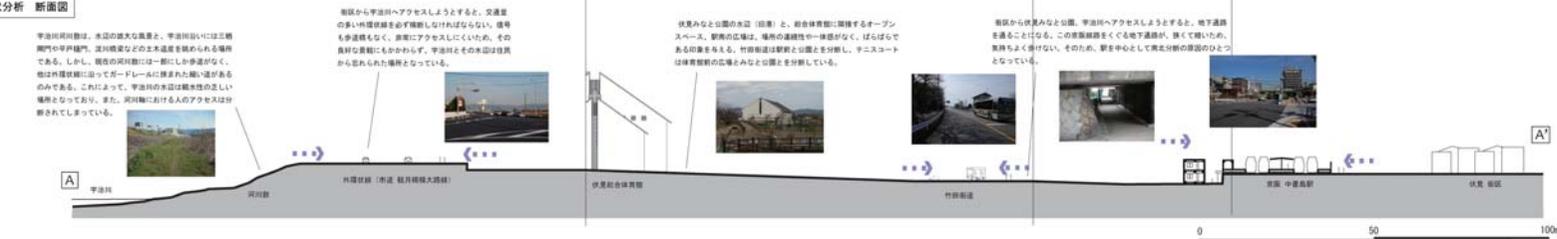
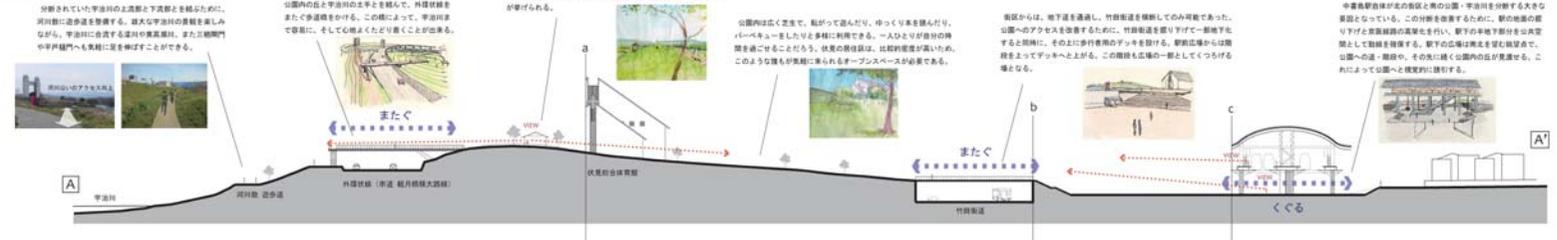
中書島駅や公園からの眺めを考えたとき、まず目に留まるのが駅の後ろに築立つ理化学工業であり、景観上は好ましくないといえる。京阪電車の車上からも見えるこの工場は、中書島駅を日常から使っている人や訪れた人がまず目にするものでもあるため、地域のイメージ形成に大きな影響を与えている。そこで、我々は発想を転換して、これをテクノスペースとして楽しむようにすることを考えた。フランスの美術館のポンピドゥーセンターのように色彩に工夫を凝らし、この場所を、「見える工場」としてランドマーク化しようとした。



Phase 4

駅前に位置する商店街は、小規模の店舗が並び、ここは中書島駅と酒や歴史の名所をつなぐ道であり、大阪や京都などからのアクセスも良い。かつて茶屋などが立ち並び、旅人の宿の場所であったという歴史もある。この立地の良い場所にある空き店舗や格安店舗を、選ばれた若者に安価で貸し出し、商店街活性化の布石となるような店舗を数店つくる。これによって駅前広場の賑わいを創出し、街と宇治川の南北の軸を強化する。

計画案 断面図



現状分析 断面図

